

もう教室を失いたくない。
後輩よ。
これから数えきれないほどの学生と歴史を刻む。
その覚悟はあるか？
君が長く生き続けられるよう、
なるべくきれいに使うね。
これからよろしくね。

●●● 講 評 ●●●

普段何気なく使っている教室が取り壊される時、教室はただの箱物ではなくなります。これまでの講義とその教員、出席していた学生、その場の雰囲気を感じ、これからやってくる学生に思いを馳せる場となり、過去・現在・未来の時をつなぎます。言い回しが心地よい、味わい深い作品に仕上がっています。



「異常気象」

現代福祉学部福祉コミュニティ学科2年
山田早紀

1年前、4月の月曜日、私は異常気象のなか、一人の女子大生と出会った。

入学してすぐ、私は「友達を作るうキャンペーン」を1週間ひとりで開催していた。小学校、中学、高校の経験からして、チャンスは今しかない、と思った。あと1週間もすれば、「ナカヨシグループ」が大量発生。異常気象。手遅れニル危険性アリ。大好きな高校の友達が誰ひとり、ここには居ないという事実で寂しさを感じつつ、新しくできるであろう友達にもわくわくして、心は先行して異常気象に見舞われていた。

キャンペーンのやり方は単純明快。大教室B棟の、端っこに縦に一列に座る、「おひとり様」に、毎日、毎授業、アタックする「だけ」だ。だがそれは、恐ろしく難儀であった。私は初日から三連敗という絶望的記録を打ち立て、相原行のバスに揺られるなか、とても落ち込んでいた。ただでさえ疲れる新学期に、さらに疲れるイベントを自主的に開催している。連敗に弱気になった私の脳裏に、中学校の思い出が映し出された。友達0人だったわたし、虐められていた、わたし…嫌だいやだ！せっかく高校は幸せに過ごせたのに、一人で昼ごはんを食べていたあの頃には絶対に戻らない。私は再びやる気を取り戻した。

だが2日目、3日目…突然うまくいくことは無く、立て続けに失敗した。ついに5日目、私は疲弊して、髪をばさりと降ろして、イヤホンをつけて音楽を聴いているのか、寝ているのか分からない人の隣に座った。様子からして一匹狼のようで、望みは薄そうであった。

授業の内容はペアワークで、プリントに「大学での目標」などを書き、交換して意見を出し合うというものだった。私は、「本を100冊読みたい、留学がしたい」などと書いた気がするが、定かではない。彼女の回答があまりにも衝撃的であったのだ。

『友達が欲しい』

えええええ！本当に？！まるでその気持ちが感じられなかった。目標の下にはコメント欄があり、私は、どこからどう突っ込めば良いのか、真剣に考えてこたえた。

『まず、イヤホンを外したらいいのでは？』

レジュメを交換すると、彼女は噴き出して盛大に笑った。
「初対面の人に、普通そんなこと言う？」それが親友との出会いだった。

私は今まで、「この子は気が合いそう」だとか、普段無意識に友達を選んでしまっていたのかもしれない。だがそれはこの経験を通じて、非常に勿体なく感じるようになった。これから先も、沢山のことに挑戦して世界を広げたい。沢山のわくわくと沢山の不安…

心はいつも、異常気象に見舞われている。

●●● 講 評 ●●●

誰もが経験する新たな環境での新たな人との出会いの場面について、心の高鳴りを気象に例えて表現されており、読み手にその時の作者の心情がよく伝わります。「異常」の内容により表現を変え、平静時の心の動きも気象に擬えて表しても良かったかと思えます。

●●● 授賞式講評 ●●●

第9回目を迎えた今年のFD学生の声コンクールでは、さらなる活性化を目指して、いくつかの変更を加えました。

変更点の一つはキーワードによるテーマを導入し、年度初めに公表したことです。これは昨年の受賞者の声を参考に、テーマとなるキーワードだけを指定することで、作品を創作する上での自由度を高め、かつ年度初めにテーマを公表することで、春学期中からFD活動を積極的に意識してもらおうという狙いです。今回は「教室」と「出会い」というキーワードを指定しましたが、実際、応募作のバラエティが格段に増したように感じました。

二つ目は「FD川柳」を新たに設けたことです。従来も川柳による応募は可能でしたが、ここ数年、俳句等の韻文作品による応募が減少傾向にありました。そこで、「川柳」をフィーチャーし、よりカジュアルに応募できる環境を整えました。また、本学のFD活動は、学生のみさんだけでなく教職員が一体となって授業を改善することを目指していることから、「FD川柳」には教職員による応募も可能としました。その結果、「FD学生の声コンクール」「FD川柳」あわせて、166作品の応募がありました。昨年の応募総数は53作品でしたので、実に3倍強になりました。また、応募者の所属を見ても、学部11学部、大学院3研究科、通信教育部1学部、そして事務組織5つと、過去もっとも多くの組織から幅広く声を集めることができました。

そして三つ目はえびよん賞の創設です。応募作品のクオリティが年々上がってきており、特に今年度は審査にあたって優秀つけがたい作品が多く、われわれも正直苦労しました。やはり一人でも多くの学生を表彰したいと考え、このような賞を急遽設けた次第です。

さて、「FD学生の声コンクール」へみなさんから寄せられた作品は、「教室」と「出会い」というキーワードをユニークに解釈し、実にさまざまな視点から描写するものばかりでした。特に、「教室」や「出会い」を一つのきっかけに、そこでの苦悩だったり、得られた気づきだったり、あるいはまたその後の自身の成長だったり、単に教室や出会いにとどまらず、その先へのつながりを感じさせる時間軸をもった作品が多かった印象を受けました。

もちろん、われわれ教職員にとってみても、日頃学生のみさんと向き合う場である「教室」という空間やわれわれが発する何気ない一言が、いかに皆さんに影響を与えるのかを改めて気づかされるものばかりでした。

その中から、今年度の最優秀賞には、1年時の授業で江戸時代の文学作品に出会ったことが、その後の4年間を左右するほどの影響を与えたことをつづった文学部4年の大野沙紀さん、そして40年間重力波の研究をしてこられたというある先生との出会いが、学ぶことの意義や自身の生き方にまで影響を与えたことを描いた大学院理工学研究科2年の竹内泰人さんのお二人の作品を選びました。実は二人とも昨年は佳作を受賞しております。また、お二人とも、昨年の座談会に出席し、冒頭で述べたキーワード式のテーマだったり、その公表時期の早期化だったりを提案してくれた方たちでもあります。もちろん、われわれは応募者の名前を伏せた状態で審査を行いますので、お二人が選ばれていることはまったく知りませんでした。その意味では、お二人がこのような結果を得られたことに、とても感慨深いものがあります。年度をまたいで本学のFD活動の活性化に協力してくれて、本当にありがとうございました。

優秀賞には甲乙つけがたい2作品を選びました。授業で出会った疑問が、挫折をもたらし、同時に学び続けることの楽しさにもつながっていることを記した文学部3年の山口力斗さん、何気なく履修した日本語を英訳する授業で、まさに世界における日本語に目を開かされた国際文化学部4年の福原知佳さんの作品です。

また、「FD川柳」では133句もエントリーがあったため、選考に大変苦労しましたが、そのなかから大賞としてペンネーム「皆勤賞」さん、文学部3年藤原ななみさん、人間環境学部4年の兼坂美鈴さんの3句を選出しました。それぞれに川柳らしくウィットに富みつつ、FDにちなんで多様な解釈ができる作品になっておりますので、ぜひ皆さんも作品をごらんになってください。そのほか、入選作として17句を選出していますが、それらについても今後、FD推進センターからの刊行物に少しずつ掲載していく予定ですので、楽しみにしてください。

受賞者をはじめ、応募してくれたみなさんが、自身の思いを表現してくれたことは、他の学生はもちろん、われわれ教職員にとっても大きな気付きになります。学生・教職員のそれぞれが、そうした気づきに、まさに「出会い」、共有していくことが、法政大学をより魅力的な場にする原動力になるのではないのでしょうか。来年度に向けて、本学のFD活動を継続して盛り上げていただければと願っています。

FD川柳受賞者発表

FD川柳大賞

おかしいな 何度も見ても Dだけど

皆勤賞

「うるさいね」私語が新たな私語を生む

文学部 藤原ななみ

老眼鏡 掛けても見えぬ このレジメ

人間環境学部 兼坂美鈴

入選

ディスカッション 白熱すると 仲良くなる

HARUHI

試験前 友人増えて レジメ貸す

ちいすけどん

先生の 言葉をググる 受講生

社会学部 幾野哲矢

希望の根 育てるために 4年間

国際文化学部 米川昌杏

問いかける 教授の目に咲く 夢と希望

FIR.FI.S.FI.K.II

初授業 新たなものに 出会う時

日向

法政へ ゆけば友達 多国籍

国際文化学部 栗原邑珠

祖父学び 母と我も座す 511

人間環境学部 遠山晴美

試験前 すぎる思いで 単位バン

人間環境学部 遠山晴美

ポケモンに 優るるキャラの 教授陣

人間環境学部 遠山晴美

広いのに 後ろに多め テスト前

理工学部 片山葉月

字が見えない ホワイトボード ペン薄く

法政いい大学だよ

夕暮れに 黒板光る 字が見えない

ブライインドカーテン推進委員会

憧れた 階段状の 教室に

小金井キャンパスに階段状の教室ないのかなしい (´ω`)

高齢化 大学院も 進行中

ゆめぴりか

シラバスは 「面白そう」との 出会いの場

T S

試験期間 なぜ高まるのか 人口密度

T S